

「所素辺鄙」小考

—遺跡調査の「体感」から探る頼朝入部時の鎌倉—

押木 弘己（文化財課 遺跡発掘調査研究員）

はじめに

『吾妻鏡』治承四年（1180）十二月十二日条は、源頼朝が大蔵郷に完成した新亭（大倉御所）に並み居る東国武士（御家人）を伴い移徙したことを伝える。頼朝が御家人らの主「鎌倉殿」となったことを象徴的に描く場面だが、同日条は「所素辺鄙、而海人野叟之外、ト居之類少之、正当干此時間、間巷直路、村里授号、加之家屋並薨、門扉輾軒云々、」と続く。人家も疎らで辺鄙な土地であった鎌倉が、頼朝の入部を境に都市化していった様子を語っている。この記事をめぐるのは、頼朝の事績を強調するための修辞とする理解を前提に、発掘調査の成果も援用した上で、頼朝入部前の鎌倉が寺社や一定規模の集落を擁する「都市的」空間であったとする考えがある（a説）。他方、入部当時の鎌倉は、平泉など東国の主要な拠点と京とを結ぶ幹線ルートからは外れた土地であったことを指摘し、記事を字義通りに捉えて鄙びた寒村であったとする言説も根強くある（b説）。

a・b両説とも論者によって濃淡があるため、ここでは個別の研究業績は取り上げない。ただし、幕府成立後の「都市」鎌倉像に引きずられてしまったが故に頼朝入部時の鎌倉を「都市的」と過大評価してしまっているという、a説への批判がb説の根底に流れているように思えるが、こうした過大視を避ける思惑が、b説では却って過小評価の側に振れ過ぎてしまったようにも筆者は感じている。その理由は終章で説明するが、他方、当時の鎌倉を「都市的」とするa説の正当性についても、当地で遺跡調査に携わって来た一人として、無条件で受け入れることは難しい。

そこで本稿では、筆者個人が経験して来た遺跡調査の「体感」に基づき、頼朝入部時の鎌倉はどのような姿で、日本史の中で如何様な位置付けができるのかを検討する。必然、実証性を欠いた内容となることを懸念するが、一つ仮説を示すことで、今後、自らが検証すべき課題を探り出す作業としたい。

1. 平安時代の鎌倉

頼朝入部時の鎌倉について言及する前に、その前史として、平安時代における鎌倉の様相を遺跡の調査成果から探ってみる。

（1）古代鎌倉郡衙

今小路西遺跡の御成小学校地点では、奈良時代に遡る鎌倉郡衙政庁の遺構が発見され、天平五年（733）の紀年銘木簡がⅠ期政庁の年代根拠となっている〔河野ほか 1990〕。筆者は近年、木簡の出土状況が不安定である点も踏まえて年代観の再検討を主張しているが〔押木 2020〕、政庁建物群が「コ」字形を呈するⅠ～Ⅱ期は、8世紀代よりも大幅に下ることはないと考えて良いだろう。報告書では、9世紀代に政庁の建物群が消失するとされ、他所への移転説も提起されているが、この時期、前庭を有する「コ」字形配置の政庁が必要とされなくなった可能性もあり、その背景として、郡衙における儀礼様式の変容が生じていたことも考慮して良いのではないだろうか。

本稿で問題とすべきは郡衙Ⅴ期の段階で、報告書では9世紀末～10世紀初頭という年代観を与えている。この時期、8世紀代まで「コ」字形政庁が展開したのと同じ空間に、掘り込み版築地業で造成され

た基壇群が南北に縦列するようになる。一部の基壇上面には礎石の根石や据え付け穴と見なせる痕跡が残っており、総柱構造の礎石建物群と理解されている。総柱建物は稲穀など重量物を収納する施設と見なせ、郡衙であれば正倉に相当する建物群と理解できるだろうが、当該期、各地の郡衙遺跡の多くが消失する傾向が指摘されている中〔山中 1994〕、こうした時期に郡衙正倉院「らしき」空間が形成される意味が問われなければならない。郡司の徴税権が弱まり国司に吸収されて行くのと重なる時期だけに、検出された建物群が如何なる経営主体のもとに構築・運用されていたのか、年代観の精査も含めて地方支配の実情に即した考察が課題と言えよう。正式報告書が未刊行の御成小学校第5次調査でも同時期とされる4基の基壇建物群が検出されている〔河野ほか 1993〕。これらの廃絶年代は不明だが、第5次調査の基壇上から10世紀後半～11世紀初頭頃の粗製土器坏が出土しているので、この辺りが下限となるうか。これ以後、遺構・遺物ともに13世紀前葉と見なせる段階まで土地利用を明確に窺わせるような痕跡は見出せなくなる。地域の支配拠点としての役割は当地から失われ、他所において、新興勢力による拠点形成が図られたことが推察できる。

（2）. 郡衙周辺寺院「千葉地廃寺」

郡衙の北方、小字「千葉地」にて古代瓦が多く出土することから、「千葉地廃寺」の研究名が付されている〔押木 2024 a〕。伽藍を構成する建物は未発見だが、出土瓦の様相から7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の創建年代が示されている〔河野 1997〕。相模国分寺の所用瓦である横須賀市乗越瓦窯産の資料も含まれることから、8世紀中葉までは改修や再建が行われた蓋然性を認め得るが、その後、平安時代まで存続したかは定かでない。郡衙Ⅴ期の並行期、相模国～武蔵国南部には南多摩窯産の瓦が分布するが、「千葉地廃寺」の推定エリアでも出土しているものか、既刊の報告書から抽出する作業が必要かもしれない。嚆矢となる研究〔國平・河野 1988〕から年月を経た現在、古代瓦の研究は大きく進展している。郡衙と同様、最新の研究成果に照らした既存資料の見直し、先ずもって取り組むべき課題である。

（3）. 集落遺跡

由比ガ浜砂丘上では10世紀前半頃までの居住遺構が検出され、これと近い時期の火葬墓も数例が確認されている。土師器甕や石櫃に納骨された他方で、このことは当地に一定の経済力や仏教の知識を有する社会階層が存在したことを物語っている。「六地藏」交差点の東方では10世紀後半以降と思しきロクロ土師器（土師質土器）が出土しており〔福田 2009〕、出土した東西溝を旧東海道駅路の後身たる東西道の側溝と見なす言説もある〔馬淵 1994〕。ただ、当地点でも郡衙の跡地と同様、これ以降の土地利用痕跡は頼朝入部以後の時代まで確認できない。

「大倉御所」推定地近くでも、近年の発掘調査によって9～10世紀代の遺構・遺物が散見されるようになって来た。こちらも正式報告書は未刊ながら、二階堂字荏柄 38 番2地点では仏教との関連を窺わせる「中万」と墨書された10世紀前半の灰釉陶器碗や、10世紀後半以降、H72段階の旗指窯産と思しき灰釉陶器深碗が出土している。前者は井戸跡から、後者は自然流路を改変したと見られる断面V字型の大溝から出土しており、その時代性も含めて興味深い事例である〔押木 2016 a〕。野口実氏の研究によれば、武門平氏の維将は正暦年間（990～995）相模介に在任したといい、『詞林采葉抄』が伝える上総介平直方の鎌倉屋敷が、祖父維将の代まで遡る可能性も指摘されている〔野口 1993〕。とすると、『天養記』が伝える頼朝父・義朝の「鎌倉之楯」が、平維将→維時→直方→源頼義→義家へ代々相伝された可能性すら浮上することになる。実証は困難であり、直ちに史実として是認はできないが、当大溝の発見は鎌倉の考古学研究上、非常に重要な意味をもっている。正式報告書の刊行は不可欠である。

(4). 葬地

由比ガ浜砂丘上の火葬墓が営まれた 10 世紀前半以降、葬送に関する遺構は鶴岡八幡宮境内の国宝館収蔵庫用地の調査で発見された男女合葬墓まで確たる事例がない〔松尾ほか 1985〕。これは頼朝による八幡宮創建（遷座）以前の埋葬遺構とされ、同一層序で出土した木製塔婆の型式から 12 世紀中頃の年代観が付されている。当時の在地社会において非常に高い経済力・文化レベルに位置付く人物が葬られた例と見なせ、それ故か、当事例は a 説の有力な考古学的根拠とされることが多い。

(5). 鎌倉外縁部

いわゆる「三方は山、一方は海」で囲まれた鎌倉中心部の外側エリアでは、発掘調査の事例が極端に少なくなるものの、山崎天神山城で注目すべき成果が上がっている〔松山ほか 1997〕。谷戸内に所在する当遺跡では 8 世紀前半段階から須恵器円面硯など識字層の存在を窺わせる資料が出土しているが、9 世紀後半～10 世紀前半には一定量の墨書土器とともに、200 点近くの南多摩窯跡群御殿山窯産の瓦が出土している。また、近傍の宝積寺跡・天神山下城では同じ頃の瓦塔片が出土するなど、平安時代前期の当地一帯には何らかの宗教的空間が広がっていた蓋然性を認め得る。1 点のみであるが 12 世紀代の遺物として白磁の玉縁碗が出土しており、13 世紀前半には池状遺構とともに一定量の手づくねかわらけが出土するなど、鎌倉の外縁部としては特異な遺跡様相を見せている。官衙とまでは言える内容ではないが、古代から地域の拠点として一定の伝統性を有する空間であったことが推察でき、頼朝入部前の在地勢力を考察する上でも重要な遺跡と言える〔押木 2016b〕。

関東地方全体の遺跡動態と同様、鎌倉でも 11～12 世紀代の遺構・遺物は極めて希薄であり、この時期に建物構造をはじめとする居住・生活様式が大きく変容したことを想起させる。簡単には遺跡としての姿を現してくれないことが、今もって当該期の考古学研究を停滞させている最大の要因となっている。

2. 源義朝時代～平氏政権下の鎌倉

それでは、文献史学からは 11～12 世紀の鎌倉は如何様に評価されているのだろうか。この分野でも確実な同時代史料は限られるが〔大澤 2021〕、頼朝の父である義朝が鎌倉に関与した 12 世紀中葉頃の鎌倉を『天養記』から探り、続く平氏政権下から頼朝入部までの時代背景を追うことで、鎌倉の在地動向を検討する。

(1). 源義朝時代の鎌倉

義朝が関東に下向したのは、この地で長子の義平をもうけた永治元年（1141）以前とされる〔川合 2017〕。そして、大庭御厨乱入事件が顕在化する天養二年（1145）までには「其後義朝称伝得字鎌倉之楯、令居住之間」と『天養記』が記すように、義朝は「鎌倉之楯」を相伝していた。これが前章（3）で述べた、『詞林采葉抄』が伝える「平直方→源頼義」へ継承された鎌倉屋敷と同じものかは検証に資する材料がないが、『吾妻鏡』からは、義朝が鎌倉エリアに 2ヶ所の拠点を保有していたことが読み取れる。一つは治承四年（1180）十月七日条の「故左典厩之亀谷御旧跡」、もう一つは建仁二年（1202）二月二十九日条の「故大僕卿沼浜御旧宅」である。前者「亀谷御旧跡」は現在の寿福寺境内とされ、こちらを「鎌倉之楯」と考えるのが一般的な理解といえ、半ば定説化しているように感じられる。後者の「沼浜御旧宅」も、古代律令制下にあつては相模国鎌倉郡の一郷として「沼浜郷」があり、10 世紀前半成立とされる『和名類聚抄』にも「沼浜郷」が載っている。現在の逗子市沼間が遺称地と推定されるが、義朝時代、さらには『吾妻鏡』編纂段階にあつても、「沼浜」の地が伝統的に鎌倉の一部として認識されてい

た、と考えると矛盾はないように思える。筆者には、どちらか一方を「鎌倉之楯」と断じるだけの見識はないが、義朝が亀谷～沼浜ルートを抑えるかたちで拠点形成を図っていたと考えるならば、寿福寺の門前から東に延びる東西道（後の六浦道）を通り、どこかで丘陵を越えて逗子市側に降り、沼間に至ったと考えるのが合理的である。丘陵越えルートを1本に限る必要はないし、場合によっては海岸方面に出てから、名越を経由して逗子市側に到達するルートも想定が可能であろう。大庭御厨乱入事件には、義朝の郎従として吉次・吉明（義継・義明）の三浦氏父子も加担していることから、義朝が鎌倉東部エリアから三浦半島一帯を自身の勢力下に置いていたことを窺わせる。六浦道沿いには義明の長男で和田義盛の父である義宗が名字地とした小字「杉本」が残り、後述する地理的環境から考えても、その蓋然性は認め得よう。

一方、乱入を受けた大庭御厨は権五郎景正が開発した後、伊勢神宮に寄進したとされ、彼の後裔である鎌倉党大庭氏の下司（現地管理者＝実質的な在地領主）の任に当たっていた。義朝一団は、「高座郡宇鶴沼郷」にあった御厨に対し「俄称鎌倉郡内」という主張をもって乱入の言い分としている点、義朝・三浦氏方と鎌倉党大庭氏との「鎌倉」をめぐる権益争いが事件の背景にあったことが推察できる。鎌倉党の勢力圏は、景正を祭神とする御霊神社や、伊勢神宮の系統下にある神明社の分布と重なり、梶原・坂の下、御霊神社～長谷の甘縄神明社に続く一帯、つまり鎌倉西部エリアまで及んでいたとされる。

つまり、義朝時代の鎌倉は、二つの有力武士団が東西に対峙する格好で支配下に治めていた可能性があり、義朝は、その一方の三浦氏に肩入れして鎌倉党を圧迫し、自身の勢力下に組み入れようと目論んだのかもしれない。それが奏功したのか、約10年後に京を舞台に勃発した保元の乱（1156年）では、大庭景義・景親兄弟が義朝旗下の一員として参戦している。この前年の久寿二年（1155）、義朝は長男義平に秩父平氏の拠点大蔵館を襲わせ、当主の重隆と、その養君で義朝の実弟である源義賢を討ち滅ぼしている（大蔵合戦）。こうして義朝は東海道諸国から南関東一円に勢力を伸長させ、これら広域の武士団を動員できる武家の棟梁として、地歩を固めて行った。

（2）平氏政権下の鎌倉

保元の乱での勝利によって、河内源氏嫡流となって伊勢平氏の清盛とともに武家の棟梁たる地位を築いた義朝だが、それも平治の乱（1159年）で義平とともに敗死したことで瓦解する。初陣であった三男の頼朝も捕らえられて伊豆へ配流となり、以後20年間、東国武士から様々な支援を受けながらも雌伏の時を余儀なくされる。

義朝亡き後、鎌倉はどのような支配構造に置かれたのだろうか。三浦氏・鎌倉党大庭氏ともに乱後も勢力を維持し、勢力図の大きな変更はなかったようだが、治承三年の政変（1179）で清盛が朝廷の実権を握ると、平家家人化していた大庭景親は相模在地での優位性を高めることになる。この時、かつて対立関係にあった三浦氏は劣勢に立たされることになったと推察でき、伊豆や房総半島などでも同様の対立構図が顕在化したことが、翌年の頼朝挙兵の直接的契機になったと理解されている。政変から一年を待たない短期間で挙兵であったため、鎌倉が景親に侵食される時間はなかったようだが、鎌倉を東西に挟んだ軍事的緊張は大きく高まったことだろう。この間、「亀谷御旧跡」に三浦義明の弟岡崎義実が梵宇を建てていた（『吾妻鏡』）、ここまでは三浦氏の勢力圏として維持されていたと考えて良いだろう。

3. 頼朝入部時の鎌倉 —「都市」か「集落」か—

かかる状況を経て挙兵、石橋山で敗走した頼朝は房総半島で勢力を盛り返し、鎌倉に入部する。それから程なくして景親が敗死し、冒頭で述べた大倉御所の完成・移徒へと続いて行く。

ここで改めて、頼朝入部時の鎌倉について、「所素辺鄙」の当否を中心に検討を試みたい。文献史学の立場からは、当時の鎌倉に都市性を認める見解があるが、その根拠とされるのが、「館＋寺社＋交通路」の複合体という認識である。ただし、これら各要素の存在は認めつつも、そこを「都市」と呼ぶか「集落」と評価するかでニュアンスには振れ幅がある。以下、各構成要素について具体像を検証する。

(1)．館

この時期の館を示唆する遺構としては、断面V字形ないし逆台形の素掘り溝が挙げられる。第1章(3)で触れた大倉地区の大溝は10世紀後半まで遡り得るレアケースだが、他の多くの事例は、出土遺物から頼朝入部の前後に弁別することが困難である。鎌倉初期の素掘り溝は出土遺物が殆どない事例が多く、開削から短期間のうちに埋没したことが指摘できる。ここにどのような意味を読み取るかは論者によって異なるだろうが、多くは頼朝の入部直後、旗下の各武士団による臨時的造作ではないか、というのが筆者の「体感」である。理由の一つとして、素掘り溝の出土遺物が、古手のかわけ（ロクロ・手づくね）と龍泉窯系Ⅰ類および同安窯系の青磁碗・皿、そして白磁の端反り碗という構成であり、これらを1180年以後の招来と理解することに矛盾がない点を挙げる。1180年より以前であっても、京都をはじめとする国内で流通していた磁器組成ではあるが、義朝期～平氏政権下に都市性を認めるのであれば、前段階の中心器種である白磁玉縁碗が一定数は搬入されていても良いのではないだろうか。龍泉窯系Ⅰ類などの年代観について、国内流通という観点を重視すれば、博多や大宰府よりも京都との整合性を図った見方をするのが合理的かと考える。

木組みなど護岸構造物を持たない素掘り溝は、流水による崩落などにより埋没が早かったと思われるが、特に断面V字形の溝はその傾向が顕著で排水には適さないという理由から、防御機能を重視した見解がある〔岡 1999・2004・2005・2006〕。筆者はこれに加え、臨時的な土地の区画と専有表明の意図が素掘り溝開削の背景にはあったのではないかと想像する。入部直後の頼朝軍にとって防御機能とともに重要なのは、鎌倉における武士団間の秩序構築であり、そのために限られた土地を有効に分割し、序列構造を反映させる形で各武士団に分配されたのではないかと推論される。分配の決定権は「鎌倉殿」頼朝にあったろうし、この時は反乱勢力に過ぎなかった彼に、鎌倉入部当初から「都市」を築く計画があったとは考えにくい。

(2)．寺社

先行研究では、『吾妻鏡』や縁起の類から、頼朝入部以前に創建されたとされる複数の寺社を抽出している。その中でも、御霊神社・甘縄神明社・由比若宮・亀谷堂・窟堂・大倉観音堂は実在した可能性が大きいとされる〔秋山 2017〕。いずれも現存する寺社地に所在したと推定されるため、発掘調査による実証は未実施である。前述したように御霊社と甘縄社は鎌倉党の勢力圏に、亀谷堂と大倉観音堂は三浦氏の勢力圏にあったことが推定される。また、由比若宮は康平六年(1063)、源頼義が石清水八幡宮を勧請・創建したとされるが、入部直後の頼朝は同宮を訪れたのではなく「遥拝」しているので(『吾妻鏡』)、この段階には明確な所在地が不明となっていた可能性がある。それぞれが実在したとして、創建された背景や造立氏族が異なる各寺社を「鎌倉にあった」というだけで一括りにせず、個別に検討を行う視点が必要であろう。

由比若宮(元鶴岡八幡宮)については近傍の発掘調査で8世紀代の掘立柱建物が検出され、古東海道の駅路と潟湖という、陸・内水路交通の結節点として早くから拠点施設が営まれたと推定されているが

[大上 2009]、平安時代の痕跡は希薄であり、11・12 世紀には皆無と言って良い。上述した「遥拝」の問題も含め、由比若宮の造営・修復に頼義・義家父子が関与したとする 13 世紀後半以降の言説（『吾妻鏡』）に、どこまで史実性を見出し得るのか。筆者は一步引いた視点を有している。

（3）. 交通路

前節で古東海道駅路と潟湖について触れたが、頼朝入部当時における鎌倉の交通路については、2 本の東西道とそれを繋ぐ南北道の存在を重視する論者が大勢的である。

東西道については内陸よりの「六浦道」の前身道路と、海岸（潟湖）よりの古東海道駅路を想定する点で各論者は一致する。官道としての東海道駅路は宝亀二年（771）の再編によってその役割を終えるが、それ以後も鎌倉と三浦～房総半島とを結ぶ重要な地域間交通路として、相模湾の海上交通とも補完しながら保持されたと考えるのが自然である。三浦半島方面からの貢納・運上物は、相模湾沿いの陸海交通網を経由して相模国府に集積されたのであろうから、駅路でなくなったから地域の幹線道としての機能を失ったとする言説には首肯できない。無論、官道時代のような高規格の直線道という姿は保たなかったであろうが。

南北道は、『吾妻鏡』に見える武蔵大路と小町大路の 2 本を想定する案は各論者で一致しており、これに犬懸坂（『延慶本平家物語』）を加える論もある。前二者は、鎌倉を囲む丘陵地の東西両裾を走るもので、鎌倉低地でも比較的安定した微高地上に立地する点、地域の幹線道としては一般的な在り方と言える。発掘調査で確認された古代集落遺跡の分布状況から、これら集落間を結ぶ前身道路の推定説は、十分な説得力を持つ。犬懸坂については、谷戸内から沢や尾根伝いに形成された踏み分け道であり、地域での必要性に応じて幾筋もの存在が想定できる。現在の鎌倉に即して言えば、「ハイキングコース」に近似した形態であっただろうが、中には馬も通れるような切り通し道として造作されることもあったかもしれない。日常的な徒歩での往来ということであれば、道としての機能性・利便性は十分に認め得る。ただ、こうした形態は都市というよりは山間部の交通形態に近いように感じられ、「所素辺鄙」の追認に繋がりはいないだろうか。

東西・南北各 2 本の主要道は、「中世都市鎌倉」の構成要素として維持され、現代の自動車社会でも狭隘ながら踏襲されている。頼朝の入部後には、新たに敷設された若宮大路とともに当時の要請に即して「間巷直路」と改変されたのだろう。発掘調査では、若宮大路・小町大路・横大路（六浦道）や永福寺に向かう二階堂大路などの側溝のほか、「大倉御所」東限とされる東御門川の旧流路などとして断面 V 字や逆台形の素掘り溝が検出され、これらは頼朝入部後に短期間で開削された可能性が高い。この点、次章ではサンプルとなる発掘調査例を取り上げ、筆者なりに「所素辺鄙」の考証を試みる。

『吾妻鏡』には、頼朝入部時の鎌倉に大蔵・小林・由比などの郷名が記載されている。これらは『和名類聚抄』など平安中期までの史料には見て取れず、いわゆる中世的郡郷制への再編によって設置された郷名であろう。これらは律令制下の鎌倉郷～荏草郷の郷域が分割・再編に及んだものと推測され、いずれも国衙領であったと見なすのが自然だろう。その管理者について確たる史料はないが、前章までの検討に即せば三浦氏がその權益を保有していたと考えるのが最も合理的かと思える。同じ時代、これらの他にも国衙領や荘園が鎌倉エリアに分布していたであろうが、当該期は「鎌倉」と一括りにするのではなく、郷・荘（庄）などといった徴税・貢納を介した支配系統に基づいて理解すべきではないかと考える。この点で、上述した寺社の分布などは一定のヒントを与える研究材料となり得るだろう。

（3）. 小結

ここまで頼朝入部時における鎌倉の様相について縷々述べて来たが、再三述べているように、肝心の

考古資料となると極端なほどに限られている。現状、国宝館収蔵庫地点の男女合葬墓とその同時期と見なせる木製塔婆およびロクロかわらけ（土師質土器）は 12 世紀中頃～後半の所産時期を考えると大過ないだろうが、頼朝の入部からどこまで遡し得るかは、絞り込むのが難しい。また、当地点の最古相を示すロクロかわらけと近似した資料が千葉地東遺跡の河川跡から一定量出土しており、こちらでは大小の二法量がセット関係として認められる。鎌倉では今もって同型式の土器が希少なだけに、具体的な年代観や土器使用者の性格については興味を惹かれるが、河川埋土からの出土ということで、資料の一括性という観点からは評価が難しい事例と言える。

考古学上、こうした遺構・遺物とは異なる研究視点として、「中世基盤層」の検出レベルについてデータの蓄積が進んで来た点、当該期の鎌倉を復元する上で有効な素材となる。鎌倉の発掘従事者が「中世地山」とも呼ぶ同層は、中世遺物を含まない黒色基調の粘質土（海浜部の砂丘では腐植質砂質土）で、地点によって様相差も認められ、実際に掘って検出してみないと分からない点も多い。鎌倉低地の複雑な形成過程を知るには、発掘調査は最良の手段と言える。中世基盤層の検出レベルについては、鈴木弘太氏による復元案が一定の到達点となっており〔鈴木 2013－図 48・49〕、発掘データのさらなる蓄積が進むことで、この精度向上も見込めるだろう。近年はGIS（地図情報システム）の使用環境も整備が進んでいるので、近い将来、より精緻な復元像が描かれることだろう。もはや、悠長に「体感」などと言っている時代ではないのだろうが、客観的データから何を読み取るか、という点で多少の意義はあるものと思いたい。

4. 「体感」で探る頼朝入部時の鎌倉

（1）. 旧地形の低地帯について

図 1 には、鈴木氏の復元案も参考にしながら筆者の「体感」を加味し、頼朝入部期の鎌倉の微地形について一案を示した。図中、ア～エとしたのは、鎌倉低地の中でも中世基盤層の検出レベルがより低いエリア（低地帯）で、相対的に居住域としての土地利用が困難であったことが推察される。北東の大蔵郷から南西方向に延び、西側丘陵の裾部（郡衙跡・「千葉地廃寺」の東辺）に続いた後、由比郷推定域の潟湖跡に向けて延びる。ここには現河川が流れるほか、中世の河川跡も見つかるなど、古来、谷筋や微高地からの水が集まりやすい状況が続いてきた。

前章までの説明に引き寄せて考えれば、義朝～平氏政権下での三浦氏と鎌倉党との対峙関係が、かかる低地帯を挟む格好で展開していたという構造を読み取ることはできないだろうか。頼朝を鎌倉に迎え入れることにより、ここを在地での勢力間争いの緩衝地帯とする目論見が、三浦氏や鎌倉党大庭（懐島）景義（景親兄）ら隣接勢力にあったとする意見〔高橋 2022〕は、入部以前から緩衝地帯としての実態があった可能性を想起させてくれる。

（2）. 頼朝入部後の排水対策

頼朝の入部後、「閭巷直路」に象徴される鎌倉低地の改造が急ピッチで進められたであろうことは前章（3）で述べたとおりだが、その一例として、小町大路の西側溝として開削された大溝について取り上げてみたい〔押木 2021－図 1〕。これは 13 世紀前葉頃までには埋没していたと考えられ、推定される上幅が 7 m 前後と、鎌倉時代初期～前期の素掘り溝としては特段に規模が大きい。図 1 には一点鎖線 A として、その推定延長ラインを示したが、それは政所跡の東辺を通過して現横浜国立大学付属小・中学校の校庭を縦断して西御門の谷戸奥へと通じる。現在、校庭下には西御門川雨水河川が暗渠となって流れており、その改修にともなう発掘調査が実施されている〔継 2024〕。東西幅 5 m 前後の調査範囲では、

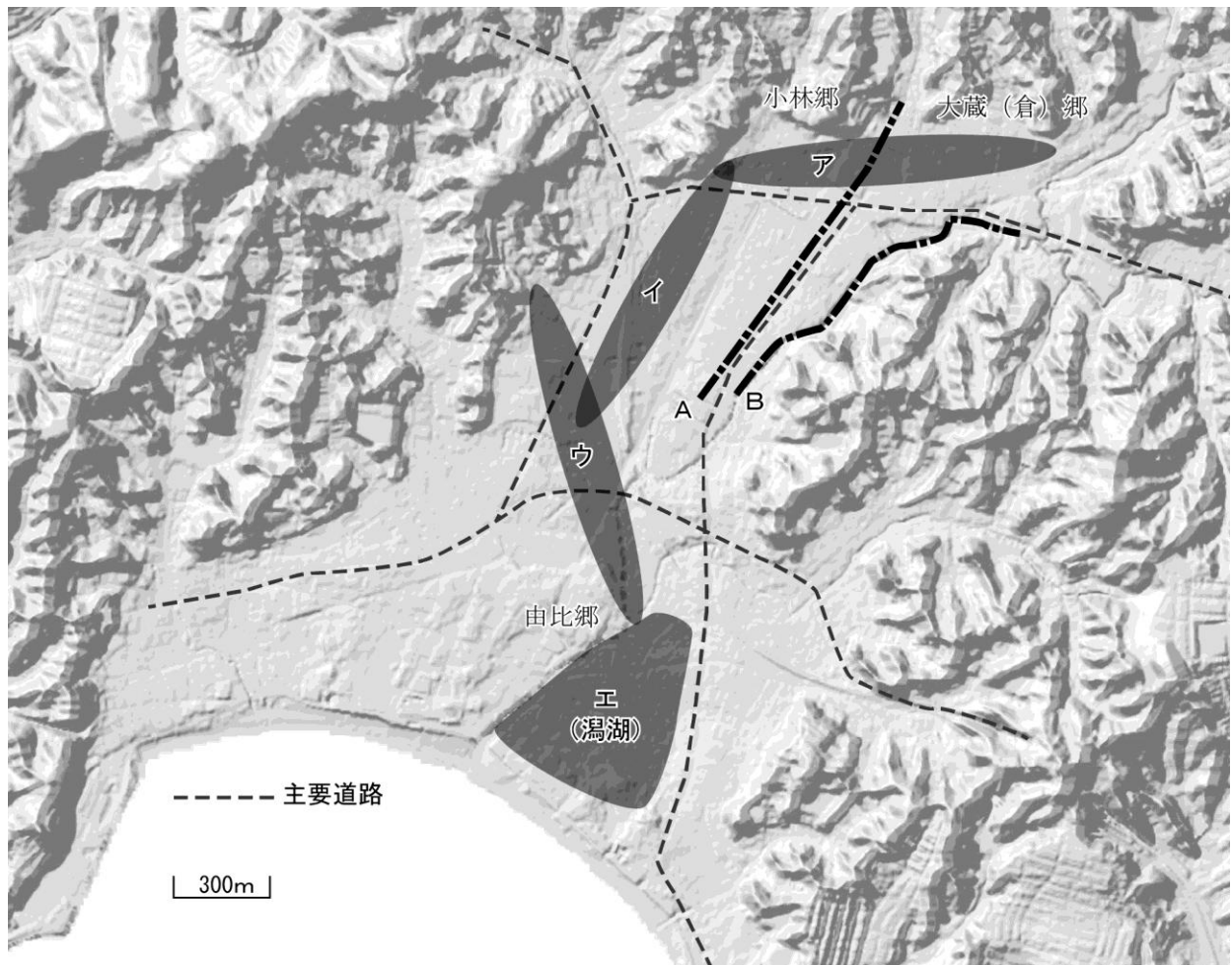


図1 頼朝入部時の鎌倉概念図（地理院地図を改変）

鎌倉初期まで遡る素掘り大溝は検出されていないが、南北方向を基調とする道路や柱穴列、池状の大型落ち込みなどの中世遺構が確認されている。校地下における鎌倉初期大溝の延伸遺構については、現時点では存在の有無を断定することはできない。鎖線Aは、「有」と推測する筆者の暫定案である。

その前提に立って図1を見ると、鎖線Aの開削によって、低地帯Aにおける北東方面からの流路や地下水を遮断し、南に流下させることが想定できる。加えて、若宮大路の東西両側溝を設けることで水流抑制を補完でき、これらが相まって低地帯イ以下での流量を抑える、という段階的な都市型排水網の形成過程を読み取ることも可能となる。規模の大小を問わず、未発見の溝跡分布を見込んだ上での推論に過ぎないが、鎌倉低地において限られた可住空間を広げるためには、かかる排水網の整備による湿潤地帯の土地改良は、「鎌倉殿」の本拠地として安定させる上で喫緊の課題となったであろう。実際、13世紀中葉以降の鎌倉では、こうした旧来の湿潤地帯にも建物遺構が進出して、都市としての広がり・密集度を急速に高めて行く。

鎌倉の排水に関連してもう一点、現・滑川流路の位置について言及しておきたい。図1では一点鎖線Bとして示したが、これより北東側の上流部では凝灰岩の岩盤層を挟るかたちで流路が開かれている。これより先は地質学の領域となるため「素人考え」を承知で述べるが、現行の滑川について自然流路とすることを疑い、人工的に開削されたものと推測することは無謀に過ぎるであろうか。かねて表明されている提言であり〔齋木 2007〕、筆者も同じ疑問を抱いて来たが、これを解消するには地質学・土木工

学など専門他分野からの反応を待つしかない。

鎖線Aの素掘り大溝が機能を失う 13 世紀前葉頃、鎌倉幕府は北条氏主導の下に権力基盤を固め、承久の乱（1221 年）での勝利や将軍御所の移転（1225・1236 年）を果たす。上述した憶説を認めるとして、大規模な流路の開削や排水インフラの更新を達成し得る経済力・動員力を想定するには相応の時期と言えないだろうか。

おわりに

本稿を通じて、「中世都市鎌倉」の基本構造が頼朝入部以前に形成されていたとする先行説について検証を行った。当該期の勢力図を検討し、これが鎌倉の旧地形と矛盾なく説明できることを指摘した。こうした筆者の「体感」に基づくならば、従来の地理学的研究は多分に平面的な捉え方であったことを指摘でき、排水インフラが整備される以前にどれだけの土地が居住可能であったか検証が必要となろう。中世基盤層の検出レベルが比較的高い若宮大路の東側エリアですら、入部以前と断言できる居住痕跡が見出せない以上、その大部分は考古学上「空閑地」と表現される耕地や荒蕪地であったと見なさざるを得ない。その意味で、「所素辺鄙」の表現は、明白な文飾・誇張とは言い得ない、というのが筆者の立場である。ただし、義朝時代から三浦氏や鎌倉党などの在地勢力が鎌倉の一部を掌握していた可能性は考えて良く、そこに各勢力が造立した寺社が点在したであろうことも否定しない。その意味では、列島各地に形成された国衙領・荘園などの経営に与る地域拠点の一つ、というのが当該期鎌倉に対する筆者の見方であり、それは各種貢納や動員を通じて地域社会にとどまらない、京都を核とするネットワークを通じて直接的・間接的に列島各地と繋がっていた [押木 2022・2024b]。当該期の鎌倉への評価を過大視も卑小化もせず、等身大の姿で見つめる意識を持つべきだろう。

冒頭で懸念した通り推論に終始したが、今後、提示した課題を一つずつ検証すべく、努力を重ねたい。

参考文献（執筆者五十音順）

- 秋山哲雄 2017 「第一章 成立期鎌倉のかたち—鎌倉の道・館・寺—」『鎌倉を読み解く—中世都市の内と外』勉誠出版
- 伊藤一美 2004 「源義朝「沼浜御旧宅」地考」『日本歴史』第 668 号 日本歴史学会
- 大澤 泉 2021 『頼朝以前—源頼朝はなぜ鎌倉を選んだか—』鎌倉歴史文化交流館
- 大上周三 2009 「鎌倉郡衙と官衙関連遺跡について」『神奈川考古』第 45 号 神奈川考古同人会
- 岡 陽一郎 1999 「泰時以前の鎌倉—都市の点景—」『鎌倉』第 88 号 鎌倉文化研究会
- 岡 陽一郎 2004 「義朝以後の鎌倉—三浦一族との関係から—」『三浦一族研究』第 8 号 三浦一族研究会
- 岡 陽一郎 2005 「中世都市鎌倉の成立と変貌」『交流・物流・越境』新人物往来社
- 岡 陽一郎 2006 「鎌倉の変容」『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 押木弘己 2016 a 「鎌倉市天神山城出土の古代土器」『考古論叢神奈河』第 22 集 神奈川県考古学会
- 押木弘己 2016 b 「古代末相模の土器」『鎌倉かわらけの再検討』鎌倉かわらけ研究会
- 押木弘己 2018 「鎌倉の「かわらけ」成立前夜」『月刊考古学ジャーナル』No.716 ニューサイエンス社
- 押木弘己 2020 「再考・今小路西遺跡の古代木簡」『調査研究紀要』第 2 号 鎌倉市教育委員会
- 押木弘己 2021 「小町大路西沿いの溝」『かまくら考古』第 49 号 鎌倉考古学研究所
- 押木弘己 2022 「国衙・在地勢力の動向と「うつわ」の変化—「鎌倉殿」誕生前史の視点で—」『時代の変換点に生きた相模の人々のくらし—古代から中世へ—』かながわ考古学財団
- 押木弘己 2024 a 『鎌倉最古の仏教寺院「千葉地蔵寺」—調査・研究の現在地と課題—』『文化財調査研究紀要』第 6 号 鎌倉市教

育委員会

押木弘己 2024 b 「「うつわ」の変化—土器飲食具の変化にみる東国中世社会の形成—」『時代の変換点に生きた相模の人々のくらし—古代から中世へ—記録集』かながわ考古学財団

川合 康 2017 「保元・平治の乱と相模武士」『相模武士団』吉川弘文館

河野真知郎ほか 1990 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団編・鎌倉市教育委員会

河野真知郎ほか 1993 『今小路西遺跡（御成小学校内）第5次発掘調査概報』今小路西遺跡発掘調査団編・鎌倉市教育委員会

木村茂光 2016 『頼朝と街道 鎌倉政権の東国支配』吉川弘文館

國平健三・河野一也 1988 「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅰ）—相模国鎌倉郡の古瓦を中心として—」『神奈川考古』第24号 神奈川考古人会

齋木秀雄 2007 「第4章 第2節 調査地点周辺の古地形」『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書—雪ノ下4丁目581番5地点—』鎌倉遺跡調査会

齋木秀雄 2011 「発掘調査からみる鎌倉 （1）大倉地域」『かまくら考古』第7号 鎌倉考古学研究所

齋木秀雄 2011 「発掘調査からみる鎌倉 中世基盤層から見る若宮大路周辺」『かまくら考古』第26号 鎌倉考古学研究所

鈴木弘太 2013 「第Ⅱ部 第1章 鎌倉の初期地形と都市領域」『中世都市鎌倉の都市構造と堅穴建物』同成社（初出2011年）

高橋慎一郎 2022 『幻想の都 鎌倉—都市としての歴史をたどる』光文社

継 実 2024 『大倉幕府周辺遺跡群発掘調査報告書—雪ノ下三丁目660番3外9筆、660番3先地点—』斉藤建設

福田 誠 2009 「鎌倉における中世前期の様相」『相模国の中世と鎌倉—中世のはじまりを探る—販票資料集』鎌倉考古学研究所

松尾宣方ほか 1985 『鶴岡八幡宮発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 1994 「中世都市鎌倉成立前史」『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院

元木泰雄 『河内源氏—頼朝を生んだ武士本流—』中央公論社

山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』

野口 実 1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』第45号 古代学協会

松尾宣方 1983 「29 小町一丁目65番10～12所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会

松山敬一郎他 1997 「天神山城（No.384）山崎宇宮廻760番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

八重樫忠郎・高橋一樹編 2016 『中世武士と土器』高志書院

山村亜希 2009 「第二部 第一章 東国の中世都市の形成過程—鎌倉の空間構造とその変遷—」『中世都市の空間構造』吉川弘文館（初出1997年）